# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

環境保全型農業と文化教育の振興による
“誰もが住みたくなる”むらづくり

受賞者　東川町学社連携推進協議会
（北海道東川町）

## ■　地域の沿革と概要

北海道のほぼ中央に位置する東川町は、総面積247.06㎢、人口約8,000名の町である。

東部には、道内最高峰の旭岳（2,291m）をはじめとする大雪山連峰があり、日本最大の自然公園である「大雪山国立公園」の玄関口になっている。東川町は上水道の普及率が０％の町であり、住民は地下に浸透した大雪山の雪解け水を生活用水として用いている。

明治時代に開拓が始まって以来、良質米産地として有名な東川町は、農業の町であると同時に、全国的に名高い旭川家具の約３割を生産する木工の町であり、大雪山国立公園や温泉地を有する観光の町でもある。1985年には「写真の町」を宣言し、「自然」や「文化」そして「人と人の出会い」を大切に「写真写りの良い町づくり」を進めてきた。写真の町宣言から30年を迎えた2014年には「写真文化首都」を宣言し、写真文化の中心地として、「世界中の写真、人々、そして笑顔に溢れる町づくり」に取り組んでいる。

第１図　位置図

注：白地図KenMapの地図画像を編集

第１表　地区の概要

| 事　項 | 内　容 | |
|---|---|---|
| 地区の規模 | 新市町村単位の集団等 | |
| 地区の性格 | 機能的な集団等 | |
| 農 家 率<br>（内訳） | | 6.6% |
| | 総世帯数 | 3,657戸 |
| | 総農家数 | 242戸 |
| 専兼別農家数<br>（内訳） | 専業農家 | 139戸 |
| | 1種兼業農家 | 79戸 |
| | 2種兼業農家 | 24戸 |
| 農用地の状況<br>（内訳） | 総土地面積 | 24,730ha |
| | 耕地面積 | 3,565ha |
| | 田 | 2,910ha |
| | 畑 | 655ha |
| | 耕地率 | 14.4% |
| | 農家一戸当たり耕地面積 | 14.7ha |

## ■　むらづくりの概要

### １．地区の特色

#### （１）東川の開拓

東川の開拓は、明治28年の春に香川・富山・愛知・徳島などから80戸ほどが入植して始められた。遠く故郷を離れて旅立ってきた農民の夢は、こ

の極寒の地に故郷にも勝るとも劣らない美田を作り上げ、毎日を白い米の御飯で食事することであった。昼間でも薄暗い鬱蒼たる原生林で鍬を振るい、入植の翌年からは早くも稲作を試みている。この試作の結果、20kgほどの収穫を得たことは農民に希望の灯をともし、明治30年には１町の田を拓いて秋にはとうとう玄米30俵を収穫することができた。

明治42年には水田1,270町歩、畑757町歩となり、米の生産額は農産総額の60％を超えて村の基幹産物となった。

その後、農業用水の浸透性が強い土質の改良のための客土事業や全道に先駆けて実施された大型圃場整備事業によって、北海道きっての米どころとなった。

### （２）環境保全型農業への取組

東川町では、減農薬対策、効果、労力、コストなどの理由から、有人ヘリコプターによる稲の航空防除を昭和61年から取り入れたが、環境保全などの理由からこれに反対する消費者の声があった。そこで、昭和63年に実験田を設置し、２人の生産者が町内２箇所（90a）の水田を使って有機無農薬による米づくりを消費者と共同で行った。このときの経験が、生産者と消費者の距離を縮めることになった。消費者は有機栽培の難しさ、特に除草作業と害虫対策の大変さを知り、生産者は消費者の食の安全・安心に対する思いの強さを知った。

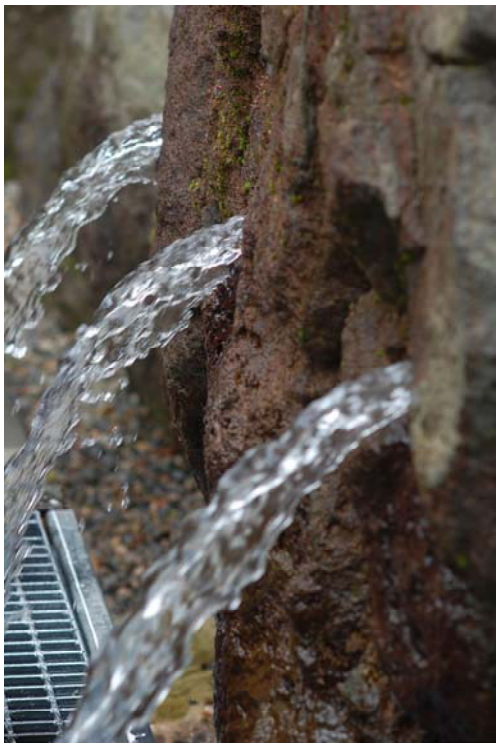


**写真１　大雪山系の清水**

もともと東川はその土質の多くが砂礫土のために農業用水の浸透性が強く、美味しい米がとれるが収量は比較的少ない。

一方、東川町の住民は地下水を生活用水として用いている。大雪山から流れ出る水は田畑を潤し、地下に浸透して、東川の人々のもとに、さらには下流にある町に流れ届くのである。きれいな水を一番最初に使わせてもらうのだから、きれいな状態で次の地域へと渡すことが、一番水を使う恩恵を受ける者の義務と責任であるという生産者の意識が徐々に高まった。

また、それまでの米づくりは、「いかに一等米を増収するか」だけを目標に進められていたが、消費者とともに米づくりを行う中で、特別表示米や特栽米が増えるにつれ、米づくりの楽しさややりがい、自信と誇りも回復してきて、東川での米づくりに活気が出てきた。

こうして、堆肥を微生物で発酵させてボカシ肥えをつくること、土壌診断を行い、施肥量を最低限とすること、病害虫の発生予察による適期適正

防除を行い、できるだけ減農薬で栽培できる体制を構築した。

平成15年に栽培履歴記帳推進運動を開始し、東川米の統一水稲生産基準を定め、平成19年には東川米信頼の証10か条の制定と種籾温湯消毒処理施設を導入して、消毒作業における廃液をなくすことに成功した。平成22年には産地独自の東川米GAP（農業生産工程管理）を策定、実施し、平成24年には申請から５年をかけて、地域団体商標(地域ブランド)「東川米」が北海道米第１号として登録された。

写真２　東川米

また、東川農業を消費者に理解してもらい、東川農業のファンを多くつくっていくことを目標に生協との米作り体験会、交流会など各種の交流を重ねている。

### （３）盛んな文化活動

戦後、公民館の発足を機に、各種の文化活動が盛んに行われるようになった。昭和60年６月１日には、開拓100年と来るべき21世紀に向け活力と潤いのあるまちづくりの方策として、現今、多くの人々に普及しているカメラに着目し、写真文化で町の活性化を目指して、世界で初の「写真の町」を宣言した。平成６年から始まった「全国高等学校写真選手権大会（通称：写真甲子園）」は、メディアでも取り上げられるなど特に有名で、訪れた高校生のホームステイ受入や歓迎夕食会の開催など、多くの町民がボランティアとして運営に携わっている。

写真３　写真甲子園

また、日ごろから写真写りの良い町づくりに努めており、田んぼのあぜには花を植え、春と夏には地域の人が協力して空き缶拾いをするなど環境美化活動に努めている。

## ２．むらづくりの基本的特徴

### （１）むらづくりの動機、背景

#### ア　学社連携推進協議会の設立

東川町の開拓120周年記念事業として、開校116周年を迎える東川小学校を新たな敷地に移転することになった。そして、教育は、学校だけにまかせるのではなく、地域も一緒に取り組む課題であると考えた町の教

育委員会が、学校教育と社会教育の連携を新校舎オープンに合わせて検討するため、学社教育連携会議を設置した。この会議は平成23年に始まり、検討委員には、東川小学校の基本計画・基本設計を行った北海道大学の小篠隆生准教授のほか、食育や自然教育等に関する外部有識者が任命され、教育委員会が事務局を担った。この検討委員の１人が社会教育委員会の委員長を務める青木哲也氏であった。

青木氏は農家の５代目として、早くから環境保全型農業に取り組むと同時に、羽衣太鼓やボーイスカウトの指導者、PTA会長、東川町ラトビア交流ボランティアの会の役員など、地域活動に積極的に取り組んでいた。

特に、平成12年から取り組んでいた「田んぼの学校」は、自らの農場の一角に学習用水田を設置し、小学５年生が総合学習で農業と食について学ぶものであった。その内容は、水の大切さを学ぶ、田植え、草取り、生き物の観察、収穫・試食と全５回にわたり、東川の米づくりを体系的に学ぶものとなっている。青木氏は、「東川町は農業の町であるが、農業を知らない子どもが増えている。もっと農業のことを知ってもらいたい」と熱心に取組を続けていた。

長く子どもたちと接してきた青木氏は、委員の１人として検討に参加する中で、社会教育の重要性、子どもたちの教育に地域の人たちが関わる重要性を一層強く認識するに至った。そして、自らが取り組んできた田んぼの学校を学社連携の取組の１つとして位置づけることを提案したのである。

**写真４　田んぼの学校**

こうした委員の声を教育委員会が取りまとめて、学社連携推進事業の基礎が出来上がっていった。東川町の豊かな自然や農業を教材とし、地域の様々な人々が関わりながら､学校教育・社会教育を同時に進めていくため、新校舎周りには、水田・畑・果樹園あわせて2.8haの体験農園や、プレーパーク、食育研修室が設置されることになった。

平成24年12月には東川町学社連携推進協議会が設立された。この協議会には体験農園専門部会が設置され、農業者と東川農業協同組合がメンバーとなり、体験農園の管理と食育事業の推進を担うことになった。

### イ　総合的な食農教育の展開

平成26年、完成した新校舎の使用開始を前に、引越し作業の全てを業者に委託するのではなく、学習教材の移動を子どもたちと住民が協力して行うことを学社連携推進協議会が提案した。引越しを機に、学校と地域とのつながりづくりを意図したものである。この提案が取り入れられ、

引越し当日にはほぼ全ての生徒と多くの地域住民が集まり、新校舎までの約800mの距離を一緒に歩き、図書室の本を運んだ。日ごろ、地域活動に積極的な東川の住民の支えあい精神がここにおいても発揮されたのである。

平成27年には体験農園がオープンし、田植えや草取り、稲刈りなどの農業体験と、新米試食、豆腐づくり、みそづくりなど、農協女性部による食育が行われた。

写真５　東小学校の給食

体験農園での田植えや稲刈りは、当然のことながら農繁期に行われる。そんな中でも、体験農園専門部会の農業者が協力して子どもたちの指導に当たった。体験農園で収穫したお米80俵は学校給食で使用している。これは、学校給食で使用する米のおおよそ半年分に相当する。

青木氏が「田んぼの学校」で子どもたちに米づくりを教えていた時には、青木氏が１人で学校側との連絡調整なども行っていた。ところが今は、多くの生産者や農協職員が参加し、学校側との連絡調整も体験農園専門部会の事務局が担うようになり、食農教育が組織的に行われるようになった。

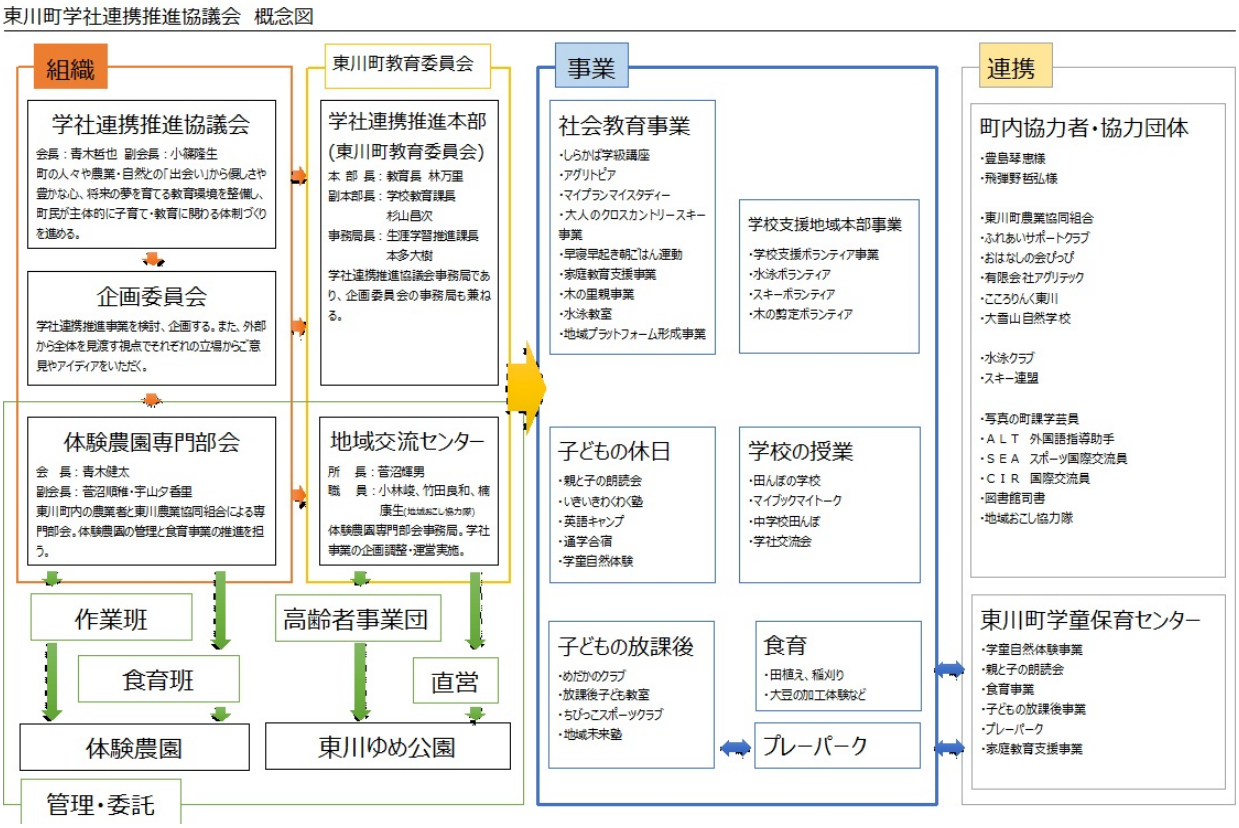
また、学校側も総合学習と家庭科をあわせて２コマとするなどの工夫を凝らし、学社連携の推進に努めている。

### （２）むらづくりの推進体制

学社連携推進協議会の構成メンバーは、町各学校長、町教育委員会、町役場各課長、観光協会、地元民間団体、東川町農業協同組合、大学教授（アドバイザー）など、町内全ての関係団体で構成する協議会である。

また、学社連携推進事業の検討、企画は、大学教授や地元民間団体など町内外の有識者で構成されている企画委員会が担っている。

## 第２図　むらづくり推進体制図




## ■　むらづくりの特色と優秀性

### １．むらづくりの性格

東川の未来を担う子どもたちの教育に地域の人たちが関わる時、その教材となるものは、やはり自然と農業である。それは、東川が大雪山系の水の恵みを受ける町であり、先人が努力を重ねた結果として、今日の東川があるからである。

加えて、「写真の町」として町づくりや地域の文化活動に積極的に取り組む気風があるからこそ、新校舎への引っ越しの手伝いや体験農園を始めとした授業のサポートに多くの住民が参加するのである。

学社連携の取り組みは、東川の人たちが培ってきたものを土台として、町の未来を切り拓く新たな取り組みである。

### ２．農業生産面における特徴

#### （１）子どもたちの心豊かな成長を願って

体験農園専門部会には近隣の農家や農協青年部が参加し、圃場の管理や体験学習の指導を行っている。

子どもたちは、手作業による農作業のみならず田植機やコンバインにも乗り、現代農業を体験する。体験農園専門部会としては、昔の農業だけではなく今の農業のあり方を伝えることにこだわっている。

体験農園がスタートした平成27年は、明治29年に富山県から団体入植した人々が初めて水稲を栽培してから120年目の節目の年であった。この地域の厳しい気象条件に耐え、未開の地へ血と汗で稲作を定着させた先人たちの「米づくり」に賭ける想いをこれからも伝え続けたい。体験農園の取組は、子どもたちの地域への誇りを育み、将来の後継者の育成にも繋がっている。

写真６　東川の子どもたち

（２）東川町のファンづくり

東川における環境保全型農業は、消費者との交流をきっかけとして始まった。特別栽培に取り組み始めた当初は差別化による有利販売を実現することを目的としていた。「安全」や「有機」、「良食味」、いずれも大切であるが、それ以上のものがほかにあれば消費者はそれを選ぶ。東川町の生産者が消費者との交流を続けながら学んだことは、東川町を訪れた消費者が、町を流れる用水を見て「きれいな水だね」と喜び、大雪の山々を眺めて「すばらしい風景！」と歓声を上げ、花がたくさん飾られている町並みに感心し、その結果として町内産農産物のファンになってくれているということである。交流の中で消費者は農業を理解し地域農業の支援者となる。魅力ある地域をつくることによって、東川町のファンを増やしていくことが重要である。

学社連携推進協議会は、見る者に憧れの気持ちを抱かせるような魅力的な教育環境を創り出し、東川町のファンづくりに大きく貢献している。

## ３．生活・環境整備面における特徴

学社連携推進協議会は、体験学習の指導など、町民が主体的に子育て･教育に関わる体制づくりを推進し、町の人々や農業・自然との「出会い」から子どもたちの優しさや豊かな心、将来の夢を育てる教育環境を創り出している。

また、地域住民を対象とした社会教育として、餅つきや味噌づくり、豆腐づくり等の食育事業を企画、実施している。

人口減少時代を迎えた中で、東川町では移住者が増加している。平成28年には42年ぶりに人口が8,000人を超えたことでも注目を浴びた。東川町を移住や複数地住居に選んだ理由の中で多くあげられたのは「自然が保たれている」「独特な景観、風景がある」「美味しい地下水」などである。こうした理由に加えて、学社連携推進協議会による地域ぐるみの充実した教育環境は「住みたくなる町」の新たな要素となっている。